

米国在住の詩人リア・ステンソンさん(左)「写真」が、福島原発事故などについての日本人の詩を英訳で紹介する『福島からの声 日本人詩人五十人の発信』の刊行準備を進めている。「今も福島の人々が苦しみを続けていることを、アメリカ人に伝えたい」と彼女は訴える。(石井敬)

詩集はコールサク社が二〇一二年夏に刊行した『脱原発・自然エネルギー218人詩集』から五十編を選び、原文と英訳を掲載する。今年「3・11」前に、米国の出版社から刊行する。

ステンソンさんは一九七七年に米日。十六年間日本に住み、大学で英語を教えた。現在住む米北西部ポートランドから約三百キロ離れた場所には、第二次大戦中のマンハッタン計画でプルトニウムが製造されたハンフォード核施設がある。この原料からつくられた原子爆弾が、長崎

脱原発詩を 米国に発信

多彩な表現 心動かす力



詩人のリア・ステンソンさん

に投下された。こうした関係から毎年八月、日本に原発が投下された日に地元で行事を開き、被爆者の話を聞く活動などを続けてきた。

ステンソンさんは「福島原発事故の話は、人ごとではなく、私自身の問題としてうけてきた。まるでギリシャ悲劇を見ているかのように、信じがたい思いでニュースの一

部始終を追ったと振り返る。「何か自分にできることは

ないか」と考えていたとき、知人から『218人詩集』の存在を教えてもらい、ドイツ版をつくることを思い

立った。「詩は人に現実を伝え、人の心を動かす力がある。詩を書く人間として、そのことが経験上分かる。当事者である日本の詩人の声をアメリカに伝えたいと思っ

た」。米国では短歌と俳句はよく読まれているが、日本の現代詩はほとんど知られていないため、「現代詩の多彩な表現を紹介し、その真価をアメリカ人に認めてほしい」という思いもある。

ステンソンさんは昨年十一月、詩集刊行の打ち合わせのために来日し、福島原発から二十キロ圏内の福島県浪江町を訪ねた。町に自宅のある詩人

根本昌幸さんの案内を受けた。「家はまったく壊れていないのに、人間の姿をほとんど見かけない。悪夢のようで、現実の光景として受け止められなかった。福島自然の美しさを見て、さらにその悲劇が強く感じられました」

詩集には、同県南相馬市に住む若松丈太郎さんが九三年、原発事故で自分の街から人がいなくなる光景を描いた「神隠しされた街」や、千葉県

の鈴木文子さんが原発労働者を一九八七年に描いた「夏を送る夜に」など、大震災前に書かれた詩も収録した。相馬市に避難している根本さんの作品「わが浪江町」は、地を這っても帰らなければならぬ。杖をついても帰らなければならぬ。わが郷里浪江町に。と結ばれる。

詩集はステンソンさんが序文を書き、若松さんとコールサク社の代表鈴木比佐雄さんが解説を寄せる。ステンソンさんは「ブラックユーモアのある作品もあれば、放射能によってトマトの皮のように人間の皮がむける比喩を用いた熾烈な作品もある。表現は多様性に富み、原発に対する異議申し立てという意味がよく伝わる。米国では福島報道は乏しく、原発推進派の力も強い。この詩集を読んで、福島で起きた原発事故が単に「災害」という無機質な言葉で片付けられるものではないことを感じ取ってほしい」と話している。

詩は難しいと相場がきまっています。珍しいが、珍しく読みやすく、おもしろい詩集に出会った。古書のエッセイで知られる青木正美が自身の営む青木書店から出した新著『詩集 古本屋人生史』だ。八十年の自らの歩みを、一年一詩と称する暦年形式で、詩または散

大波小波

文詩風の表現で回顧する。著者はすでに『古本屋奇人伝』『古本屋五十年』など多くのエッセイ集をもつが、右の詩集は、奇知にとましく伝わっている。

思いをへて、やがて七十前の「人生とは、生きている間の自己満足だ」との心境にいたる「変化」が、生ながら、右の詩集は、奇知にとましく伝わっている。

年季の入った私詩集

むその表現形式がおもしろい。島崎藤村まがいの十六歳の「初恋」、短い私小説めく二十五歳の「結婚」、四十代の「若い人妻」への

治したがんの再発への不安や、年齢に似ぬ「艶夢」の告白もある。「いのちなり線香花火にするものか」といった句もある。

八十年にわたる「私詩」は、自分に正直に、誠実に生きてきた作者の人格そのまま、心を打たれる。一本気なそれらの自己告白こそ、当今のいわゆる現代詩が失った、大事な基本姿勢といえる。その詩にはたっぷり人生の年季が詰まっている。難解を気取る俗物ブ口詩人らに、ぜひ読ませたい一種の「奇書」ともいえよう。(へんこつ屋)